

秋 田 さ き が け

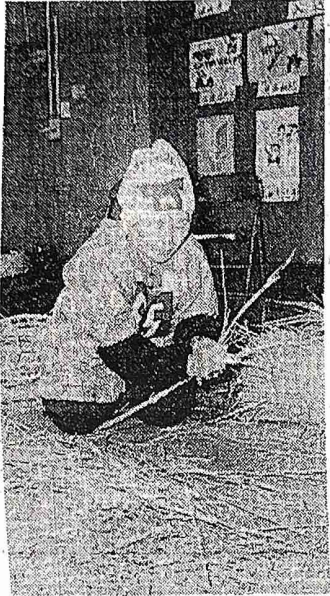
可)

昔なつかし ワラのにおい

百分間にどれだけ稲がなせるか、そしてそれをトング状に積み上げた高さで……。かつてはまさに利用された稲わらも、今では邪魔物扱いされがち。これを活用して何か新しい催し物はないか。と若者たちが愚案の末、考え出したのが、このほど仙北郡西仙北町で行われた「第一回なわならではピラミッド世界大会」会場の中、参加者目撃されたのは「風変わりな競技を楽しんだ」十七日朝刊で一部既報。

なわならでは ピラミッド大会

かつては稲刈りを終え、普及で邪魔物扱い。焼いて肥料にやませるしかなかった。処理されるのが多くなると、農村に欠かせぬ資源として、公害源として目の敵に。有効利用されてきた稲わら。さえされた。農家では、むしろ、ピラミッドのひもの、冬期間、子供たちも手伝っ



紅一点の鎌田氏は二位に入賞

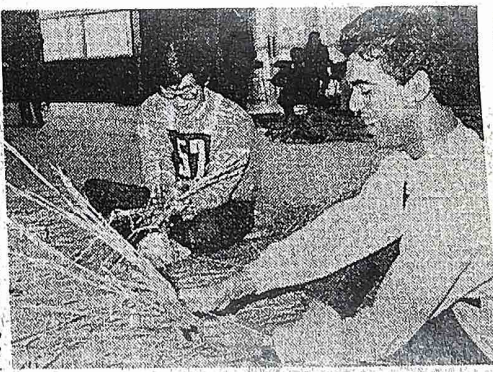
長さ と 高さ を 競争

西仙北町 100分間で一本勝負、カエル村

て一年間に使う稲をなつたものだが、それも今は昔の風景になってしまった。「日本人の主食であり、

われわれ秋田県人にとって経済の要でもある米。それを取り巻く環境が厳しくなっている現在、もう一度農村生活の原点を見つめ直してみたい」と語るのは、大会を主催した同町の三二独立国秋田カエル村代表の佐々木正光さん(右)。

参加したのは近隣市町村を中心とした十二人。外国人にも秋田の姿を知ってほしいと呼び掛けたと云う。秋田鉱山専門学校留中のモハメッド・アシュラスさん(左)、スリランカとチヨン・テホさん(右)、メーラレーシアの二人がチャレンジャー。



慣れない手つきながら挑戦したアシュラスさん(右)とチヨンさん(左)。一・二七歳のピラミッドを作った同町大会の農業、佐藤成一さん(左)。見物のついでで来場して飛び入り参加、見事「オータム・アワード(秋の王冠)」の称号を獲得した。佐藤さんは二十二年ぶりにやっただが、だんだんと感じがよみがえり、懐かしい思い出もよみがえってきたとニコニコ。

競技時間は五分。会場には二・五秒分の稲わらがつまみ上げられた。参加者の職業は農業者、会社員、タクシー運転手などを数え、が、年齢の人が多く、ほとんどの参加者が多く、ほとんどの経験のある人は、稲わらに手を付かずに、稲を積み上げていく様子を見て、驚かされた。

「スリランカでは稲刈り、動物のえさ、紙の原料に使っています。初めてやっただけ、稲の農業鎌田トキさん(左)は二十二年ぶりにやっただが、だんだんと感じがよみがえり、懐かしい思い出もよみがえってきたとニコニコ。



なつた稲を割れないようにトング状に巻いて「ピラミッド」に

つり高いピラミッドを作らなければならぬ。最下位は免れたチヨンさんは「僕が生まれた所は、一方、留学生の二人は開会前に五分程度の講習を受けたけど、なかなかに慣れた感じが、稲わらに手を付かずに、稲を積み上げていく様子を見て、驚かされた。

慣れない手つきながら挑戦したアシュラスさん(右)とチヨンさん(左)。一・二七歳のピラミッドを作った同町大会の農業、佐藤成一さん(左)。見物のついでで来場して飛び入り参加、見事「オータム・アワード(秋の王冠)」の称号を獲得した。佐藤さんは二十二年ぶりにやっただが、だんだんと感じがよみがえり、懐かしい思い出もよみがえってきたとニコニコ。